

會學濟經學大國帝都京

叢論濟經

號四第 卷十第

行發日一月四年九正大

論 說

勞賃の經濟的及び道德的性質(一)……………法學博士 田島 錦治

酒の政府專賣と公益……………法學博士 神戶 正雄

鎌倉時代の家族制度(三)……………文學博士 三浦 周行

明治の米價調節(六)……………法學士 本庄榮治郎

經濟學不進歩の原因に就きて……………法學士 石川 興二

所得稅均等負擔の理想と實現(二完)……………法學士 汐見 三郎

時事問題

現代方便生活と社會の問題……………法學博士 戸田 海市

雜 錄

戰後の獨逸の勞働市場……………法學博士 山本美越乃

諸國行政統計書の梗概(一)……………法學博士 財部 靜治

手形交換所制度論(二)……………法學士 大森 研造

時事問題

現代方便生活と社會問題

戸 田 海 市

今日社會問題と云へば労働問題と同義に解せられるか、其實現代文明國に於ける總ての階級か労働者と同一性質の生活上の壓迫不自由を感じ、従つて労働者の社會改造の要求は全社會の要求を代表して居ると云へる。現代人か此の如く一般に生活の壓迫を感じるに至つた所以は、本誌前々號に於ける智識階級解放問題の中に論じた如く物質過重の弊に陥り、之か爲め總ての階級の生活か餘りに強く方便化手段化せられ、眞に生活の自由を感じ得ざるか爲めである。労働は商品にあらずとは現代の社會問題を解決する根本原則として夙に識者の主張した所である。此原則は國際聯盟規約に採用せられて文明國共通の現實政策とせられたのであるか、併し現代の實業家政治家其他總ての階級者も自己の活動の重要部分か報酬を得る爲めの方便であつて、實質上は商品と異らざるの感を禁し得ないであらう。人間か生きると云ふことは内面的外面的に、生産的消費的

に活動することであるから、活動の内に自己を見出たすの外に自由の生活はない、然るに活動の重要部分を占むる生産活動を單に方便とする現代人が生活の壓迫を感じるは當然である。特に重要な生産に付て方便活動に甘んずる者は消費活動に於ても自由を得るの能力を有することか困難である。

物質過重の生活とは人間の總ての活動の意義を主に其活動の結果の内に見出すことに偏する巧利の生活を云ふのである。生産の結果即ち外面的なる損得賞罰褒貶に刺戟せられ追ひ立てられて暮らすと云ふ方便の生活は、自由なく餘裕なき生活であつて、覺醒した人間に取つて此の如き生活は眞に自己の生活と云ふを得ない。如何に仕事か繁忙であつても又全く他人の爲めに行ふべきものであつても、若し其仕事が眞に自發的自主的に行ふものであるならば、吾々は悠々として生を楽しむの餘裕を有する。然るに仕事は如何に閑散であり又自己の爲めのものであつても、其仕事か方便的のものであるならば、吾々は絶へす一種の強制を感じて生を楽しむの餘裕を有たぬ。餘裕ある生活とは自發的に生活することであり、自由に創造に耽ることである。此の如き生活に於ては目的と方便とが融合統一せられて居るから、其生活は常に内面に充實し緊張して居る。然るに現代社會に於ては總ての階級の生活か方便化巧利化せられて居るから、其生活は外面的には甚だ繁忙であり華麗であつても、内面的には常に空虚寂漠に苦しまざるを得ない。現代の社會問

題の本質は人間か方便生活より脱出して眞の自主自由を恢復し、生活の目的と方便とを融合せんとするの運動であり、又其運動は單に労働者階級の運動ではなく、總ての階級の是認に由て維持せられて居る運動である。世人は今日の役員労働者を以て賃銀奴隸と稱し、社會改造は即ち賃銀奴隸制度の廢止に外ならぬと主張するか、其實は政治家實業家自由職業者等の總ての階級が大なる程度に有形無形の外的報酬の奴隸となつて、一生を暮らすのであつて、眞の自主自由を有せざるの苦痛は労働者と異らず。故に方便生活に苦める現代人は最も露骨なる生活の切り賣りを爲さざるを得ざる労働者の口を藉りて其苦悶を訴へつゝある。労働者よりも一層責任の重き地位に立つ他の階級は、労働者と異つて往々良心の切り賣りまでも餘儀なくせらるゝから、彼等の苦痛が一層大であるとも云へる。

現代の經濟界に於ける生活か甚た方便化せられて居ることは周知の事實である。企業者は事業其物の發展を樂しむよりも、之を以て營利の方便とするの傾か甚だ強く、又役員労働者は勞銀を得る爲めの方便として其生産に協力するのであるから、労働其物には意義がなくて苦痛である。最近先進諸國に於ける労働者の所得は大に増加して中等階級の夫れを凌く有様であるか、併し其勞銀増加は労働を苦痛より快樂に變ずるの効果はない。此の如く總ての生産協力者か其生産的活動を以て夫れ自身には厭ふべきものとし、單に之を以て外的結果を得るの方便と考へるときは、

眞の職業尊重又は勞働神聖の思想も存在し得ない。經濟上の活動か此の如く方便化せられて居る爲めに、生産活動を純然たる苦痛犠牲の如く見做し、單に生産結果を得る爲めの生産費に外ならずとする巧利的打算に立脚する所の從來の經濟學の結論か略は現代の實生活の説明となり得るのである。併し生活の方便化せられて居るのは決して獨り經濟界に止まらぬ。政治學藝總ての方面に於ても同様に方便化が行はれて居る。今後の社會改造上教育の普及は物質の公正なる分配と同様に重大の關係を有するものであるか、從來の教育も亦極端の方便化に陥つて社會の腐敗を助長しつゝある。例へば小學校は中學校に入るの方便であり、中學は高等學校大學に入るの方便である云ふか如く學校其物か方便であり、又學校に於ける教習も進級卒業して稱號を受け、立身出世をする方便である。此の如く方便化せられた教育界に於て思想の自由とか眞理の爲めの眞理と云ふ氣分は生長の餘地か少ない。勞働問題や婦人解放問題の緊張せる今日に於て、公私諸學校の昇格運動の起れるか如きは怪むを要しない

二

現代人の生活を此の如く方便化せしめた物質過重思想は、人間の最大の又は只一の幸福か人間の活動其物よりも活動の外的效果を得るに在りとする思想である。財産や位階や稱號の所有に人生を託せんとする過度の所有慾である。法律制度組織自身の方に對する過度の信用である。現代

の科學と交通との進歩は外界征服事業の大發展を來たしたか、之と共に物質過重思想が益強まり社會公衆は總ての事業に對して只管外的効果を大にすることを要求して。所謂消費者本位の思想が確立し、各事業に従事する人々の勞働が如何に不快のものとなるも、其勞働の結果が豊富低廉に社會に供給せらるゝときは、社會は之を事業の進歩なりと賞讃し、此の如き豊富低廉の供給を爲さしむる爲め各事業に殘酷なる生存競争を行はしめ、又迅速に結果を得る爲め専門家と稱する部分人を作つて機械的に之を結束協力せしめた。此機械的結束を行ふ所の機關が即ち政治經濟教育等に於ける專制主義である。同じ弊害に陥れる個々の生産協力者も生産活動の内に人生の意義を見出すを得ず、其結果を收穫することを只一の目的として働くから、必然協力者相互の間に、就中指導者と被指導者との間に、經濟事業に付て云へば資本家と勞働者との間に、有限なる生産結果の分配を争ふことか甚しくなり。其中の強者たる資本家か不當の分け前を得て、他の協力者か如何なる困苦に陥るをも顧みず。之か爲め本來最も親密なるべき協力者か互に不倶戴天の仇敵たるか如き反感を生ずるに至つた。

從來世人は社會問題の實體は分配問題にあると考へて専ら分配の工夫に没頭し、現代人の苦痛の根源が一層深く内面に潜み、外面の分配不公平は其結果の一つであるとは考へなかつた。生産活動の目的か全然又は主として外的効果を得るに在りとする思想の續く限り。社會主義其他の如

何なる社會組織の下に於ても。生産協力者の間に重大の分配争ひか起らざるを得ない。人間か此思想に支配せらるゝ限りは、生物學的なる生存競争説及之より出發せる階級戦説か眞理であり、同胞兄弟は相親しむ爲めに生れたのでなくて相戦ふ爲めに生れたことゝならざるを得ない。物質的には緊密なる相互依存の關係を有するも精神上には常に相戦はねはならぬ。現代人は外界征服に最も成功した人間であると誇つて居たか、何時の間にか最も強く外界に依頼する不自由の人間となつたことを發見して苦悶し初めたのは既に久しき以前からであるか、最近には此物質過重思想を脱せざる限り、如何に社會組織を變更して見ても重大なる分配争ひの生ずることを免れ得ないといふ感か痛切となりつゝある

此の如き物質過重主義の下に社會公衆は果して何物を供給せられたりやを經濟生活の上より例示せんに、文明國に於ける生産物の過半は眞に人生の幸福に多く關係なきものであり、特に其生産物は量的であつて質的でなく、従つて感覺を刺戟する力は強いが精神に満足を與へる力は少ない。是れ現代人か身邊に物質を埋積しつゝ生活の無味寂漠に苦しむ所以である、元來享樂財には飲食品の如く一時に消費し盡すものと、衣服住家具の如く保存性を有するものとがあり、後者を消費するに當つて吾々が其效用を意識に上ほす機會は寧ろ少ないものである。吾々は衣服を纏ひ家屋に住居するも不斷に衣服住居を享樂するの快愉を感ずるのではない。故に此の如き保存性ある

享樂財に付て人類は古來之を美化し、不斷に且つ強く其效用の意識を喚起して之か價値を高める工夫を行つた。即ち量的の實用品を質的ならしめた。此品質化の作用は生産者が生産活動其物に自己實現の最大の機會を認めた場合、即ち生産の過程か生産者にとつて品質化せられた場合に初めて大に成功するものであるか、生産活動を甚しく方便化せる現代に於て其生産物か數量的となるは當然である、固より現代の生産物には多大の勞苦を費して過度に裝飾を加へた物が多いか、此等の物は高尚の趣味を満足するに不適當であり。其の多くは實用品の本質を破壊して眞に其價値を増加するの效果なく、特に現代的裝飾の多くは強烈に感覺を刺戟する一時的作用を有するに過ぎない。故に其消費者は飢渴に刺戟せられて飲食する場合と同じく忽ち飽滿に達し、其物の實用力の尙ほ存續するに係はらず之を抛つて更に新規の生産物を要求する。現代生活は此の如く實感の刺戟に加ふるに刺戟を以てした爲めに中毒に陥つて居るから、醒めた瞬間の苦痛か特に強くなる。實に現代生産者の大なる部分は此の如く無意義又は有害の生産の爲めに甚しき勞苦に服せねばならぬ。現代は最も富める時代なりと稱せられるか此の如く量に富みて質に貧なるの結果、全體に於て左まで富んだ時代ではなくて生産の勞苦の多い時代である

品質的の生産物を消費することは單純なる生理的又は消極的享樂の域を脱し、一の愉快なる精神的活動又は創造を爲すことであつて、一面に此の如き貨財を生産する活動も大なる程度に享樂的

創造的となる。即ち其生産と消費とが共に自主自發的の生活となる。現代人は生産は方便に過ぎずして消費こそ自由の生活である云ふか、其消費方面に於て人間に眞の自主自發の満足を與ふるを得へき趣味的消費に付き現代人は上述の如く主に外部よりの刺戟に自己を服従せしめて絶へず壓迫不満足之感を懷き、眞の自發的なる消費活動に由て満足を求むるの能力を失ふて居る。生産も消費も共に活動であるか、人間の活動として重要部分を占むる生産活動に付き、方便的にして自主的なるを得ざる現代人か、消費活動に於ても自主自發的なるを得ざるは當然である。予輩は後に論ずる如く徒らに過去を嘆美する一部の復古的改造論者に同意する者ではないか、併し現代生活か種々の點に付て貧弱となりし事實を拒むを得ない。現代に於て外部の社會組織か急速に生長せるに反し、民衆の精神の生長か之に伴ふを得なかつたことか、物質の豊富となりしに係はらず生活内容の貧弱となりし點多き所以である。

現代社會を改造する爲めには先づ社會一般か覺醒して方便生活より脱出することに努めねばならぬ。戦後に於ける英佛等の状態を見るに、其生産の恢復は三五年の間に望み得ざるは勿論、恐らく従來の如き半は無意義なる量的生産の恢復は永久に不能であらう。今や人類の歴史は一大轉化を爲すへき時機に到達した。今後先進國に於て量的生産の恢復か困難となるものとすれば、人々は已むを得ずして質的生産に満足を求めんとするであらう。何となれば現代人の内面に質的要求

か消失して居るのでなく、只た其發展を妨げられて居るからである。覺醒せる今後の労働者に對して以前の如き無意義なる量的生産を多く負擔せしめ、彼等をして厭ふべき方便生活を營ましむることは益困難となるか、併し彼等をして大に質的生産に努力せしめ、特に生産過程を質的にすることに由り有意義の生産に努力せしむることは可能である。今後の世界に於ても生活を維持するか爲めには多大の量的生産物を必要とするか、此の如き生産に付ては之に従事する者に出來得る限り自發的の労働を爲さしむるの方法を立て、即ち其生産過程を生活に有意義ならしむる爲め特に多大の苦心を爲さねはならぬ

三

現代に普通なる大規模の事業は多數人の協力に由て維持せられて居るか、假りに經濟上の事業に例を取つて見るに、機械の發明改良は少數の技術家か之を行ひ、事業の經營は少數の資本家か之を行ひ、多數の役員労働者は上より命せられた細密の分業法に由り盲目的に一小部分の労働を繰返すに止まり、其事業全體の意義も、自己の従事せる部分仕事と全體との關係も充分に理解し難く、又事業全體の運命を決定することに付て有力なる發言權を許るされないから、全體の決定に参加することに由て自己の直接に従事せる部分の運命をも自から決定したりとの感を生し、即ち部分を通して全體を味ひつゝ労働を採ることも出來ない。故に此等の多數協力者は單に收入を

得るの方便として勞働を爲すの外はない。現代の社會生活全體も亦茲に述べた例と同様のものがある。交通の偉大なる進歩に由り各人の日常生活が廣大なる地域に亘つて極めて密接に共同生活の組織の内に編み込まれ、各人は部分的なる自己の地位を通して此尨大緊密なる社會組織全體を理解することも出來す、従つて社會全體を以て自己のものとする程の強大なる同情も之に對して起り得す、特に全體の運命の決定に對して有力なる参加を爲すことの出來ない爲めに、同情に由る綜合同化作用の發動が甚しく妨げられる。現代人は此の不自然なる社會組織を維持する爲めに煩雜なる制度を設けて實際には少數專制者が其運用の局に當り、而も其運用たる極めて表面的機械的のものとなつて居る。物質過主思想に捉はれた現代人は此社會組織を利用して成るべく迅速に又成るべく多量に結果を收穫する爲めに、各個人に専門的能力を養成して部分化事を機械的に繰返さしむるの方法を探り、即ち全人を造らす部分人を造ることに由り此組織を利用する速成方針を探つた。故に今日の人間は社會全體に對し機械的には極めて緊密の依存關係を有するに係はらず、自から全體を爲すものと感しつゝ、生活することを許るされない。此の如く社會と個人との有機的精神的の結合の不備不足を彌縫する爲めには制度の專制力を以てすることが必要となる。資本主義の跋扈と云ふも畢竟此專制制度の一種であつて、其性質は政治教育其他總ての共同事業に於ける專制主義と同一の役目を爲すものである。是れ現代に於て獨り勞働者のみならず、總て

の階級が尨大なる社會組織の壓迫の下に不快不滿の生活を營まざるを得ざる所以である。生活は藝術たらざるへからすその主張は、自由なる生活が獨り自主的自發的活動の内に存し得ることより起る所の當然の結論であるか、自己の生活せる社會を綜合して味ふことの出来ない現代人の生活が藝術となり難きは已むを得ざる所である。

社會組織が地域の廣さと生活事項とに付き、即ち外延的と内延的とに此の如く膨脹するに伴ふて、之を組織する各個人の全體に對する理解と同情との發達か之に伴はず、機械的に社會組織が迅速の生長を爲すに反し、民衆の精神的生長か之に伴ふて其組織を消化して行くことか出來ず、從つて各人か全體として感しつゝ、生活するを得ざることか現代の根本痛弊であるか、之に對する社會改造の方針は大體に二つある。一は此の如き尨大なる社會全體に對して民衆の理解と同情とを充分に發達せしむるの不能なることを前提とし、其の理解と同情との支配し得る程度まで社會組織の範圍を縮小し、各人の共存關係を此程度まで稀薄にすへしと云ふ主張である。此主張を有效に實行する爲めには戰前に獨塊等にて行ひたる復古的中等社會政策の微温的方法を以て足れりしない、之を徹底せしむる爲めには今日の機械を破壊し、又現代の科學をも否認せねばならず。論者の目標とする社會組織に付ては必しも其意見か一致せず、或は現代國家の成立以前の地方經濟時代即ち中世の手工業農業時代を復活せんとする者があり、或は全く新なる小規模の共產社會

の組織を主張する者もある。彼の無政府主義は通例人間を以て神に近き萬能者の如く信するものであると評せられて居るか、一方より見れば個人の能力が果して今日の如き龐大なる社會組織を精神的に消化する程に發達し得るやを疑ふことから起つたものと見ることも出来るやうである。總て此等の社會組織縮小の意見は其實行か不能なるのみならず、人類の進歩の爲めに不利である。吾々か自國の外にも外國あることを知るときは生命を賭して之れと交通せんとし、地球の南極北極か人間の住居に適せず又吾々の生活に直接の利害關係を有せざることを信するも、尙ほ吾々は懸命に之を採撿せされは安心するを得ない。現代人は不幸なる方便生活に甘んずると云ふも、尙ほ旺盛なる智識慾は消失せず、機會ある毎に之を満足せしめんとする、従つて吾々は一旦獲得したる科學的智識や其結果たる發明改良の技術を抛つ能はさるのみならず、多々益之を進めることを要求する。一度ひ智慧の木の實を味ふた人類の先祖か再び以前の渾沌に立歸るを得なかつたと云ふ神話は今日の人間に取つても眞理である。獨り智識慾の生長力か此の如く大なるのみならず、其他一般に精神の生長力は大なるものであるか、現代の弊は之か養成に付ての苦心か足らないのである。從來吾々は餘りに制度や物質の上に努力を傾倒して人間生長の爲めに努力することを怠つたのである。人を育てることよりも物を造ることを重んずる現代に於て、物質生活の豊富なるに從て人口制限の強まると云ふことも偶然であるまい。

改造方針の他の一は民衆の智識感情を大に發展せしむるの可能なるを信し、今日の社會改造上の急務は之を發展せしむるの方法を講ずるに在りとするものである。現代文明國が政治上に民主主義を行ひ、民衆をして全體の政治生活の運命の決定に参加せしむるの途を開いたに係はらず、從來其參加を有效ならしむるに必要とする民衆の能力を養成するを怠つたことの甚だ誤れるは夙に識者の主張した所であるか、此事たる獨り政治方面に限らず、他の總ての共同生活に付て見るも同様である。戰爭以來先進諸國は民衆の物質的貧乏を除くと同様其精神的貧乏を除くの必要を感ずることか痛切となり、今日の中學程度の教育を以て漸次に國民的最低限即ち義務教育とし、更に高級の教育に付ても勞働時間短縮に伴ふて之を汎く各階級に自由に開放せんとしつゝある。只た從來の教育向上論の多くは直接に生産能力を高めると云ふ物質過重思想を脱せず、従つて其教育は矢張り從來の部分人を速成的に造り上げることゝ重きを置くやうであるか、吾々の今後最も必要とする教育は全人を造り、民衆をして總ての共同生活の支配に對し有効に参加するの能力を養はねばならぬ。如何にして此の如き教育を民衆に與ふべきやは特別の研究を要する問題であるか、兎に角從來の如く少年青年を學校内に閉鎖して主に書物の上の教育を與ふる方針が甚だ不適當否な有害であり、少年も社會の一員である以上は少年に適當なる共同生活を實地に擔任するの機會を與へつゝ之を養育することを必要とするは明かである。

民衆の教育は決して學校や書物に限られたものでなく、政治經濟其他總ての共同生活に付き全體の運命の決定に積極的に參加するの途を開き、其能力を發展する實地の機會を與へることか何よりも緊要である。教育の意味は人間の固有する力に發展の機會を與ふることである。吾々が日常生活に付き正當の方法にて協力することは相互に機會を與ふることであるから、廣き意味に於ては教育である。既に相當に能力の進みたる者に對しては百の説法よりも一の實行の機會を與ふることか有效の教育である。前に述べし如く現代社會に於ては社會組織の生長の迅速なるに反し民衆の精神的生長か之に伴はないことか、實に政治經濟其他總ての方面に專制主義を成立せしむるに好都合となつて居るか、更に此專制主義の實行の結果は被專制者に對し精神的生長の最も大切な機會を奪ふことに由りて益其生長を妨げ、特に民衆の本來共同生活に對して有する所の同情心を萎縮せしむるのみならず、往々之をして反社會的ならしめるのであるか、之と同時に專制者も共同生活を能く理解し同情し得る地位に置かれて居るに係はらず、其特權的地位を有するか爲め自然に之を濫用して利己的反社會的となる。此點より見るも總ての階級の精神的生長の爲めに專制を排して均等の機會を與ふるの必要か明かである。

吾々が共同生活の決定に參加するの權利を與へられて有效に之を行使するときは、實際の日常生活に於て如何なる部分仕事を擔任するも尙ほ之を全體の有機的部分として味ふことか出来る。

即ち現實の部分を通して精神的には全體として生活することか出来る。今日の如き細密にして且つ固定せる分業生活が果して今後も許るされ得べきものなるやに付ては大なる疑問が起らざるを得ないか、併し大なる社會團體を組織して之に適當する如く諸事業を大規模に行ふこととする以上は、吾々か或程度に分業を行ふことを避くるを得まい。併し極端に走らざる限りに於て吾々か分業を行ふことか、必然に全生活を味ふことを不能ならしむるものではない。手工業者の如きは一人にて仕事の總ての部分を行ふか故に其仕事自身に大なる興味を感ずると稱せられるが、併し一つ一つの時間には仕事の一部分を行ふに止まることは、大工場に於ける分業労働者と多く異なる所かない、只た手工業者は仕事全體を能く理解して部分と全體との關係を有機的に觀察し、且つ工場に分業労働者と異つて自から全體の運命を決定するか故に、各部分をも全體として味ひつゝ、労働することか出来るのである、即ち全體と云ふ抽象的のものか具體的に部分と云ふ形を採つて進行するのである。各人をして共同生活全體を理解せしめ、従つて自己の營む仕事と全體との關係を理解せしむる爲めには、假令へ他の方法を以てすることか出来るとしても、獨り此共同生活に同情して之を自己の生活なりと感せしめ、従つて自己の營める部分仕事を全體として味はしむる爲めには是非とも共同生活全體の決定に参加するの權利を之に認めねはならぬ。而して他に對し同情して活動することは自己の爲めに活動するよりも一層其活動を自由にし自發的にするの力を有す

るを常とする。例へは自己の利益を増加する爲めに多く勞働する場合と、他人の窮に同情して之を救ふ爲めに収入増加を得んとして同じく多くの勞働を爲す場合とを比較するに、収入増加の爲めの勞働たることは同一であり。即ち其勞働は共に方便的であるか、併し後の場合に於て方便たり苦痛たるを感ずることか少ない。與ふる者は受くる者よりも幸福なりと云ふ諺の如く。同情は人をして自由自發的ならしめ、従つて生活を藝術たらしむるに偉大の淨化力を有する。同情こそ部分を化して全體とするの力を最も多く有するものである。故に吾々が共同生活を營むに付ては如何にして各人の之に對する同情を生長せしむべきやか最大の問題となるのである。

自由自發なることは藝術的活動の生命である。社會を改造する爲めには生活を藝術たらしめざるへからすと云ふに方り、世人は多く詩人や畫家の單獨活動を聯想し、又社會改造論者の中にも前に述へし如く主として手工業者や農民の單獨活動を眞に藝術的なりとする者もあるか、此の如きは藝術の意義を不當に狭く解するものである。今後も詩人や畫家や農民や漁夫の單獨活動の必要なるは科學者の研究室内に於ける單獨活動の必要なるか如くであり、又今後も此の如き單獨活動を欲する人間の少なからず世に存在することも疑を容れない。併し人間の多數は他の多くの人々と共同して活動せんとする強き傾向を有し。彼の神系質にして多數者と相和し難き性癖を有する多くの詩人や畫家と異り、快活に且つ熱心に共同活動を爲すことを要求する者である。故に其

協力其物を眞に各自に自發的ならしめ、従つて協力事業が客觀的には如何に機械的數量的のものであつても、之に付て協力し互に相扶くると云ふ氣分を各自に主觀的に愉快ならしめ藝術的ならしむることか、今後の社會改造の中心目的とならねばならぬ。吾々か活動の結果と同しく活動其物を此の如く重要視することを要すとすれば、共同活動の場合に於て各自か他の協力者に對して探る所の態度か最も注意を要する問題となるか、此態度は仕事其物に對する理解と同情とに由て決定せられる。從來は活動を以て結果を得るの方便に過ぎすとしたるか爲め、共同活動に於ける此態度を定むるに付ても主に結果を得るに適當なりや否やに着眼した、例へば從來能率技師は生産を大にし又は労働者の疲勞を減すると云ふ結果を擧ぐる爲め、労働者に對し盲目的に自己の指圖に服従することを要求し、或は學者か自己の意見を主張するにも專制君主か命令を下すか如き態度を以て世間に對し、只管ら思想を善導するの結果を得ることに腐心したのであるか、此の如き態度か非藝術的であり。又一般協力者の活動を藝術的ならしむるを得ざることか明かである。政治上の共同生活に於て專制者の善政よりも寧ろ拙劣なる自治を撰むへしと云ふ主張は一般に承認せられ、又後進の民族自決主義も正當視せられんとして居るか、此趣意は一切の人的交渉に於ても徹底せられねばならぬ。此點より見るに彼の理想的社會を造り出す爲めには手段の如何を問はずと主張する極端の階級戰論者は大に反省せねばならぬ。不完全なる人類社會に於て社會改造上時

に激烈なる階級戦の行はるゝは避け難き必要を有することは之を認めねはならぬか、併し多くの極端なる階級戦論者は從來の通弊に陥り、理想的社會と云ふ結果のみに着眼し、此結果を産み出したす所の活動自身は單に方便に過ぎすとするのである。活動を強く方便視して結果に急ぐ人間か果して能く與へられたる理想社會の下に理想的に生きる能力を有すへきかは頗る疑問とならざるを得ない。又理想的社會の下に於ても絶へず修正改造の活動か起つて、人間の永久の進歩か實現せられるのである。吾々の生活は畢竟此修正改造の活動即ち結果への道行きから成立つものであるから、吾々は修正改造の結果を益理想的ならしむると同様に、結果に到達する道行き過程をも出來得る限り理想的のものとすることに努めねはならぬ。特に共同生活能力の根原を爲す所の博大なる同情心を衰弱せしむる所の憎惡嫉妬復讐の如き萎縮的感念を煽揚することは出來得る限り避けねはならぬ。